

私は保育士になりたい。中学生のころ、何の気なしに職業体験で保育士を選んだ。子供なんてわがままで、生意気で、私には保育士なんて似合わないと思っていた。しかし保育園児は生命力に満ち溢れていて、私はこの子達の成長の一端を担いたいと思ったのが、保育士を志したきっかけだ。

保育園や幼稚園は、保護者の払う保育料だけで成り立っていると思っていた。しかし実際は、保育料は一部に過ぎず、他は自治体や国の税金で成り立っている。税金は、人件費・施設維持費・給食費の補助など、多くの部分が税によって賄われているという。つまり保育士は、子供やその保護者だけでなく、社会全体に支えられて働いているのだと知った。税があるからこそ、保護者が保育料の高さに苦しむことなく、安心して保育園に自分の子供を預けることができる。もし、税がなかったらどうなるだろう。保育料が高くて払えない家庭が増え、子供たちが十分な保育を受けることができないかもしれない。税は保護者や保育士の負担を減らすだけではなく、子供たちの健やかな未来を約束するために、必要不可欠なものなのだ。

一方で、現場には課題もある。保育体験で、手作りのおもちゃがたくさんあり、子供たちはそれらで楽しそうに遊んでいた。先生に尋ねると、おもちゃの材料費は自費だと教えてくださった。税金や保育料で賄われる運営費には上限があり、すべて支払われるわけではないらしい。申請すれば買ってもらえる場合もあるが、時間がかかるため、自腹で用意したほうが早いこともあるという。私はこの事実を知り、税の大切さをより強く感じた。保育士が子供たちのために自分のお金や時間を使って工夫しているのは、まぎれもない子供たちへの愛情であり、尊いものだと思う。しかしそれを正当化するのは間違っている。こうした負担を減らし、子供たちと関わる時間を増やすためにも、税の使い道が現場の細やかな部分まで届くことが、この課題の解決方法のひとつだと考えた。

昨今、減税を謳う政党を支持する若者が増えている。しかし、減税というのは、支払う税金が減るという意味では聞こえはいいが、私たちの暮らしがおろそかになるのに加えて、子供たちの未来を狭めてしまう諸刃の剣だ。私は、今の税によって支えられた環境を最大限に生かし、子供たちの将来を守っていききたい。そして、現場で感じたことを社会に発信し、保育現場において税が正しく使われるような仕組み作りをしていきたい。

税は、見えない糸のように人と人をつなぎ、未来を形作っている。その中で私は、どんなことができるだろう。次の世代にバトンを渡せるよう、税が作る社会の一部として、私はこれからも夢に向かって歩き続ける。